



立教大学広告研究会
30周年記念誌

目次

ごあいさつ	4 ~ 8
広研O B会会長 勝呂 哲郎	4
広研初代部長 小山 栄三	5
広研部長 平井隆太郎	6
立大校友会会长 砂田 重民	7
立大校友課課長 石田 弘	7
東広連 初代委員長 伊豆 儀巳	8
現況報告	9 ~ 13
57年度広研委員長 武田 智哉	10~11
57年度C S店長 桐 基晃	12~13
小山先生を偲ぶ	14~15
広研部長 平井隆太郎	14
初代委員長 染野 郁郎	15
広研O B会会長 勝呂 哲郎	15
藤井寛前O B会会长を偲ぶ	16~19
33年卒 戸田 茂	16~19
広研初代委員長挨拶	20
初代委員長 染野 郁郎	20
第一線からのレポート	21~41
33年卒 秋山 晶<部員との座談会>	21~22
28年卒 志津野知文	23~27
38年卒 柏木 新	28~35
40年卒 小口 宏	36~37
41年卒 福久 均	38~39
49年卒 大貫 憲章	40
51年卒 松川 哲夫	41
広研<年譜>	42~43
広研今昔	44~71
29年卒 成田 義輝	
31年卒 勝呂 哲郎	
32年卒 菅頭 裕	座談会 44~47
32年卒 室屋 至	
33年卒 戸田 茂	
34年卒 宮下 洋	48
35年卒 宮田 靖匡	49~50
36年卒 <グラフティレポート>	51
37年卒 伊藤 隆一	52~53
38年卒 松沢宏太郎	54~55
40年卒 杉田復二郎	57
第13回広研・C S <フォトレポート>	58~59
43年卒 上沢 邦夫	60
44年卒 黒岩 俊隆	61
45年卒 <グラフティレポート>	62~63
46年卒 <グラフティレポート>	64
16代委員長 小沼 和明	
17代委員長 篠輪 正則	
18代委員長 福久 均	委員長の悩み 65~67
19代委員長 岸 秀雄	
50~53年卒 <ランダムグラフィ>	68~71
30周年記念パーティ	72~74
34年卒 岡村 典男	74
O B会会則	75
編集後記	76

広研三十周年を迎える

立教大学広研OB会会長

勝 呂 哲 郎



立教大学広研OB会発足以来、意義ある満三十周年を迎えるOBの皆様、現役の皆様に謹んでお慶び申しあげます。

私は57年の役員総会で、藤井会長の後任としてOB会々長を引継ぎ、57年8月28日、東京プリンスホテルのマグノリアホールに於きまして、三十周年記念パーティを実施致しましたところ、諸先生を始め、ご来賓、OB各位の多数のご来席を戴き、盛会裡に終了致しましたことは、私の最も光栄の至りで誠に感慨無量であり、皆様に深く感謝を申し上げます。

顧みますと、33年前、小数の仲間達がマスコミ研究を夢みて古い木造校舎で産声を揚げ、意義ある会をつくって行こうとクラスの友人、ゼミの友人等、勧誘を始めました。

当時（昭和29年7月）の急務は、森永製菓（株）のご後援で学生キャンプストアを再開することでした。

森永のお話によると、学生キャンプストアの歴史は昭和5年頃に実施され、戦争で永く中断されておりましたが、再開させようと計画が持ち込まれたのが私達参加の動機がありました。

千葉の内房海岸で、明治、早稲田、立教の三大学広研の学生キャンプストアはここにスタートしたのであります。基本的には森永（株）側より土地、建物、一部什器の貸与を受け、各校は広告、宣伝の実務を自主的運営（学宿研修）のもとで研究することを目的として、夏休み期間（7月中旬～8月下旬）中海の家、キャンプ第1回を開催しました。

そして今日の広研発展の基盤となりました。現在、独自のキャンプストアに変り皆さんの努力でその歴史は今を継いで居ます。

立大キャンプ・ストアの思い出

立教大学社会学部名誉教授
立教大学広告研究会初代部長

故 小 山 栄 三



光陰矢の如し、昨日のことの様に思われます。私達、この三十年の歳月が流れ、今日こゝに記念誌の発行を迎える、子供の成長の如く喜ぶ館山の地元の方々、諸先輩の皆様の大きな励しが暖かい心に結ばれ成長されたものと信じます。

OB会の皆さん、会員は年々増え続けてゆく事でしょう。広研設立の種を植えてくださった成田大先輩を中心とした芽を確実に今まで育てあげた歴代の指導者と部員の皆様、助け、守ってくれた関係各位の皆様の本意をより大切にして行きたいと思います。願わくば、今後共組織の強化と相互の親睦を図るため、役員一同、努力を致します。

OB諸兄、学生の諸君、広研発展のためにも一層のご助力をお願い致します。

終りに、小山栄三先生、藤井寛前会長のご冥福を祈り、併せて皆様のご健勝とご繁栄を祈念してご挨拶とします。

合掌・九拜

「過ぎ去ったものはすべて美しい」とドイツの詩人シラーが書いているが、これの解釈には年寄になると未来がなく、あるものは追憶だけだと云ふ意味が含まれていると云う。

私が立大に御世話になっている時特に印象に残っているもの、一つにはキャンプ・ストア開店の件があった。そしてそのストアが開店三十周年を迎える、一入感慨が深い。

戦いすんで世が平静になると駐日米軍兵士の家族が海水浴を始めた。それにつられて日本人も家族づれや、学生、ヤングが群をなして海水浴場に殺到し、どこの海水浴場も人出で賑はっていた。

その頃すでに慶應大学は葉山に、早稲田大学は勝山にキャンプストアを設けて活躍していた。それで立教大学もキャンプストアを設けようとの学生の諸君の発意に同意、協力することとなり、館山をその設置場所として選んだ。たまたま館山出身の学生が広研研究会の部員をしていたので地元の市役所や住民との接触は楽しく進行した。しかしストア開店のための資金がゼロなので、その工面から始めなければならなかったので苦労した。

たまたま筆者の旧制高等学校の後輩に電通の吉田社長がいたので、彼と学生諸君との意見を聞いて森永製菓にお世話を頼むこととなり、吉田社長を通じて森永の幹部に紹介して貰った。広研研究会の委員長をしていた藤井君は学生諸君の意見をまとめるに強い指導力をもっていたのでキャンプ・ストアは順調に開店されることになった。しかし地元にはすでに多数の商店が開店しているのでそれらの人々と邪魔にならず反感を買はずして親交と好意を結ぶために学生諸君は相当苦労したようである。海岸を掃除したり、盆踊りに参加したり、また小学生のグループの仲間となったりして地元に歓迎される雰囲気

を作りあげた。

私は広研研究会部長として一夏一度は現場視察に行くことにしていました。或夏「先生を歓迎するため観艦式になぞらいてヨット式をやりますから列席して下さい」と学生が駅に着くと窓越しに知らせて呉れた。聞くと立教に関係のない人にも交渉して、そのヨットを提供して貰い文字通りの館山の全ヨットの観艦式になっていたので私も感概させたこともある。

こうしたことは恐らく藤井委員長の着想と指導力から生れたものであろう。あの酒好きの藤井君が若くして亡くなったことは呉れぐれもおしまれ残念に思っている。

立大のキャンプストアを通じて学生諸君は客に対する応接態度、友人同士親密感の醸成等人間関係に関する知識と体験を得ることは学校内の教室では出来ない。その意味でキャンプ・ストアで短時間でも生活することは男女お互に人間性をぶつけ合うことであって云はゞ人間形成の道場で修業することもある。後続部員の訓練と学習を期待し、先輩部員の社会での健闘を祈って筆を置く。

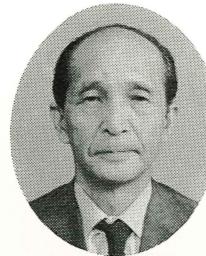
三十才誕生を迎えた立教大学のキャンプ・ストア
お目出度う。



ごあいさつ

広研三十周年を祝す

広研部長
平井 隆太郎



私が広研の諸君を知るようになったのは昭和20年代の終り頃、当時故小山栄三先生が顧問をされてていたので、その驥尾に付して色々な会合に出席したのが始めてあったと思う。菅頭裕君や藤井寛君の委員長時代である。食糧品やアルコール類の配給制度がまだ名残りを止めていた当時のことで、何かといえば口実をつけて飲み歩いたものである。広研の諸君も同様で双方の趣味の一一致が二次会三次会となったのは時のいきおいというものであろう。小山先生はアルコール不感症の気味だったので最後までつき合ったのは私だけであった正に飲み会専用の顧問である。

菅頭君もよくつき合ってくれたが、何といつても若いだけに飲むについては一枚も二枚もうてである。おおむねこちらが先に疲れてしまう。そういうときに藤井君が花火の真似をして楽しませてくれた(花火踊り?)が、これはもう絶品というふざわしい名人芸であった、百人近い集団が第何次会かで十人くらいに目減りしたところから始めて披露してくれるので、この至芸を実見した人はかなり飲み手ということになる。

広研の諸君は飲み会でも元気であったが、いうまでもなく、館山のキャンプストア、秋の立教祭では更に本領を発揮してくれていた。

研究会や広研連合の行事などなど今日もそうだが、当時もかなり多忙な日程をこなして活躍していたわけである。小山先生や私にとっては世話いらずの優等生団体でもあった、実質的にはOB諸君が顧問団格で活躍してくれたお陰であろう。

キャンプストアには何度か厄介になったが、結局、楽しく遊ばせてもらったという記憶しか残っていない。キャンプストアの新製品でラビアンローズ(バラ色の人生という映画がはやっていた頃)という奇妙なジュースを振舞われて小山先生ともども批評の言葉に苦しんだ覚えがある。必ずしも不味くはなかったが、華々しいネーミングほどには味がイマイチだったのである。これも、今となってはなつかしさが先立つ憶い出である。

小山先生の定年御退職のあとを受けて私が顧問を引き受けことになったが、それからでも十数年を経過した。相変わらずの活躍ぶりで顧問とはいいうものの安心して

眺めていればよかった。立教祭が中断されて淋しくはなったが、広研の諸君にとってはそれだけ活動の全力が生じたことにもなるなどと屁理屈をつけてはみたものの、何といつても不正常な状態には違いない、立教祭の飾り付けを広研が一手に引き受けている時代が戻ることを心から期待する。

優等生の広研が事件らしい事件に巻き込まれたのは一度だけ、館山の黒潮国体の年であったか、隣家の主人がキャンストのバンドのドラムを騒々しいと憤って破いたことがある。些細な事件ではあったが、国体開催で緊張していた警察がその主人を逮捕してしまった。結局、示談になって、間もなく釈放されたが、実は、広研の諸君が八方手をつくして身柄の貴い下げに成功したのであった。たまたま私の同期生が館山の市長になっていたので私も館山まで出かけたが、市長をわざわざまでもなく広研の諸君の奔走で事は済んでしまった。広研の本領ではない政治的事件であったが、仲々やるものだと思ってひそかに感心したものである。

広研の諸君は集団としては規律もしっかりしているし、この事件に見られるように常識的な対応にとたけている。これが三十年間に養われた伝統というものであろう。

広告は、よかれあしかれ、今日では日本文化的一大要素となってしまっている、これを研究対象とする広研の存在意義は今後、増しそれ減ることはないであろう。広研は生命の有限な個人とちがって三十周年のあとは百周年二百周年をも祝うことの出来る団体である、よき伝統を承けて息の長い活躍をつづけることが広研の諸君に課せられた義務であと思う。

三十周年を一つの区切りとして諸君に対する期待を新たにするものである。OBの諸君も同様の思いであろう、何はともあれ、これからも大いに頑張って下さい。広告研究会三十周年ほんとうにおめでとう。

ごあいさつ

ますます活発なご活動を

立教大学校友会会长
砂田 重民



立教大学広告研究会の創立30周年のお祝いを、心からお慶び申し上げます。

学生の課外活動が、所謂愛好会・同好会の形ではじまり、これが30年の長きに渡り、維持・発展された過程には、幾多の困難な問題にもぶつかり、この幾多の問題を乗り越えた時、その都度グループの結束力が強まって来た事でしょう。クラブ活動の発展は、そのままOB会の結束・発展につながって来るものと思います。貴OB会は、6百名に及ぶメンバーを擁する大きな集団と聞き及んでおります。OB会の発展は校友会にとっても慶びとするところです。様々な集団が、夫々に活発な活動を行ない様々な形で活動される事が7万3,000名の会員を擁するわが校友会にとっても、大きな組織力となるものと考えております。

貴部は、広告と言う、常にその時代の先端をゆくものを対象に活動されており、常に次の時代を考慮し、また

過去の良さを残しつつ新しいものを造り出されている事と思います。こうしたクラブ活動を体验しつつ小規模ながらクラブと言う一つの社会を運営してこられ、社会に出られた今日、OB諸氏一人一人にとって、クラブ活動の体験が、いかに大きな財産であるかを感じておられる事でしょう。

旧制時代の卒業生としての私達にとって、立教での生活は6年間でした。しかし立教の名は、卒業して40年たった今も良きにつけ、悪しきにつけ、ついてまわるものであります。6年間の学生生活の中でのクラブ活動の体験が、いかに我々にとって意味あったかを、夫々のOBが現役諸君にも継承していただき、30年の伝統が、50年へつながる活動を展開されます事を願ってやみません。

今後とも貴会、貴OB会がますます活発な活動を展開され、大きく発展されますよう祈念いたします。

三十周年おめでとう

立教大学校友課課長
石田 弘



近年は情報化時代と言われております、その先駆者として立教大学広告研究会が時代に即して示して来た働きは、すばらしいものでありました。30年の間に、600名にのぼる、有意な部員を育て社会に活躍する人材を送り

出した事は、誠に素晴らしいものであります。
30周年本当におめでとうございます。今後ますますのご発展とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

東京四大学広告研究団体連盟結成の前後

東京四大学学生広告研究会団体連盟 初代理事長
(明治大学広告研究会役員 O.B.)

伊豆儀巳

広研30周年目の57年夏、同窓の後輩から広研OBが集まる日を設けたので「学生キャンプストア」にぜひおでかけくださいとの誘いをうけました。毎年、夏になると学友と苦楽をともにした当時の合宿生活のことが想い出され、一度は訪ねてみようと思いつつも、つい雑事に追われてはたせぬままになっていました。

カーフェリーから眺める鋸山の読んで字の如き鋸形の山なみや、あっという間に着いてしまった浜金谷港、そこに停泊する漁船やゆきかう漁師たちの赤銅色に日焼けした顔つき、古老蒼然とした駅舎や私たち学生に特別親切にしてくれたK旅館、たいへんお世話になった合宿先のY家、よく利用させていただいた氷屋さん、食事当番の買い出し先きで、毎度サービスしてくれた肉屋さん、八百屋さん、ばん台に人気モノのお嬢さんが座っていて、われわれをドキドキさせてくれたオフロ屋さん……など、懐しい街のたたずまいとともに、つぎつぎと私の目に前にあらわれてくるのでした。

早朝の海岸では、「学生キャンプストア」と明示された店の前で、男女学生が先輩の指導よろしきを得て朝礼が始まろうとしていました。ひきつづいてラジオ体操、ランニング、店周辺の清掃などが整然とおこなわれていました。そこには昔と少しもかわらぬ姿がありました。潮の香りをかぎながら、当時の仲間たちがくりひろげた珍談奇談や笑いあり、涙ありのエピソードが頭のなかをよぎり、どっと懐しさが胸にこみあげてくるのでした。

当時の東京六大学のなかで、「広告」の講座やゼミが設けられ、クラブ活動がおこなわれていたのは、たしか明治、立教、早稲田、慶應の四大学のみではなかったかと記憶しています。

そして、この四大学広告研究会共通の年中行事のひとつが前述の「学生キャンプ・ストア」だったのです。ひごろ勉強している広告理論を学生自身の手によるキャンプストアの経営を通じて、具体的に実践していこうという主旨で、当時スポンサーになっていた森永製菓宣伝部関係者の深い理解と暖い援助があつてできたこ

とでした。

明治は保田、立教は館山、早稲田は勝山の房総各地に、そして慶應が湘南の葉山にそれぞれ店を構えました。森永本社での事前の打ち合わせ会や実施後の反省会、表彰式、実施期間中の陣中見舞いなどを通して交流を深め、励ましあったり、販売実績や店の宣伝に、独自の催事企画にお互いに競いあつたものでした。

このような状況もひとつのきっかけとなって、各大学広研のなかから、さらに積極的に交流をはかっていこうという気運が盛りあがり、「東京四大学学生広告研究団体連盟」の結成へつながっていきました。連盟理事長は各大学持ち回りということで、当番校に明治が当り、はからずも私が理事長の大任をおおせかかるはめとなりました。

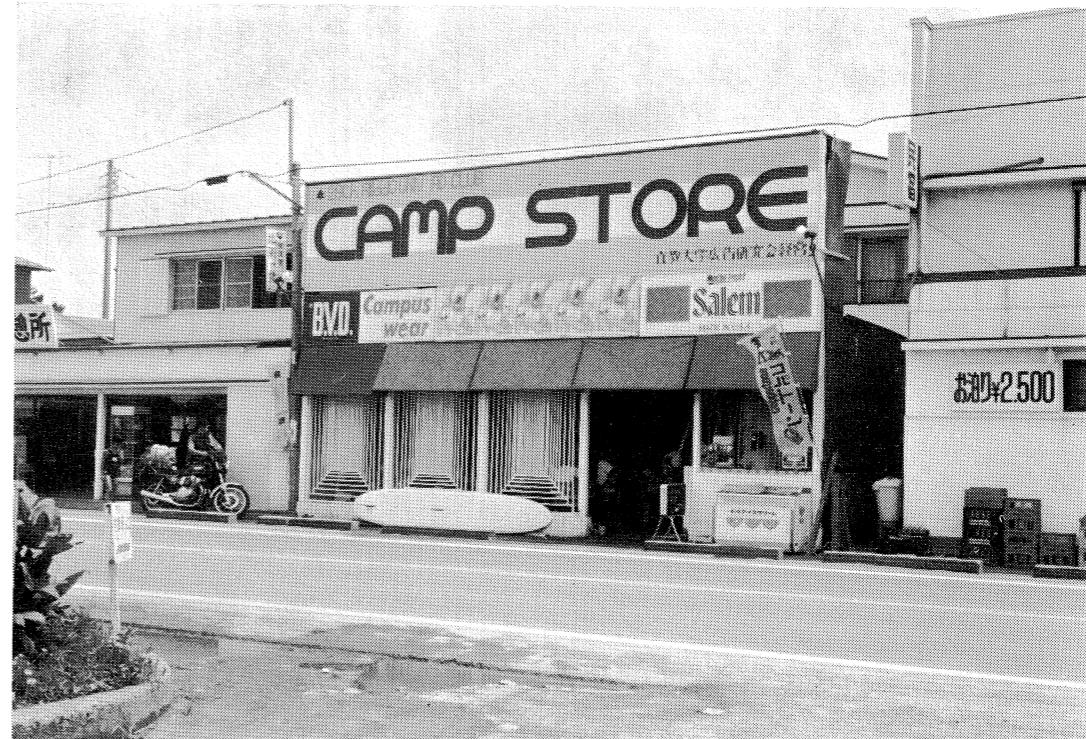
池袋のキャンパスに、三田の山上に、早稲田の森にお邪魔し、連盟の規約づくりや役員の選任、結成式会場の選定など各大学広研幹事有志と接渉をつみ重ねていきました。結成式会場は明治大学和泉校舎があてられ、各大学広研部員各位の多数の参加により、無事責任をはたすことができました。

あれから30年の才月が過ぎ去りましたが、いまでも私は当時の各大学広研諸兄氏の元気なお姿や森永キャンプストアの生活をあざやかに、懐しく想い起こすことができるのです。

(いづ・よしみ昭和33年明治大学商学部商学科卒業、明大広研副幹事長、現在、エーザイ株式会社医薬営業本部制作室室長)



現況報告



広研現況報告

昭和57年度委員長

武田智哉



広告研究会も30年という長い歳月を経て来たわけですが、OB諸氏の在籍された広研と現在の広研とはかなり活動も変わって来たことだと思います。そこで現在の広研の概要を御報告致します。

☆57年度12月現在正会員数について

4年男子8名、女子37名。
役員（3年）男子18名、女子6名。
2年男子6名、女子2名。
1年男子10名、女子13名。

うち4年生は活動にはタッチしないため、実際の正会員数は65名。

☆主要行事について

「12月」委員長改選……毎年1人の立候補者しか出ないため、信任投票の型式をとる。出席正会員数の3分の2信任を獲得すれば委員長就任。

・学内広告展……研究活動の一環として立教大学構内、5号館コモンルームで行う。年間作品パネル展示、CF展示他。見学客動員のため、企業回りをしてプレミアム商品を集め、役員が街を走りまわる時。

「1月」広研卒業式、追い出しコンペ……世話をかけた先輩方を社会につき放す。この時はコンペも一味違う。

「2月」新勧パンフレット制作開始……場所はたまり場になっている喫茶店「茶房留」。ここを作戦基地に役員は記事集め、掲載広告集めに走りまわる。毎年苦労するのは何といっても広告取り。予算は10万程度、発行部数は3000部。

「3月」2月につづきパンフレット編集に追われる毎日学校はどうに春休み。授業もないのに「茶房留」に日参。

・春合宿……新入生歓迎に向けて対策を練る他、研究活動スタートに向けての下準備。分科会を初めとして、日頃と違った環境の中での勉強会。最終日はもちろんコンペを行い、次の日は後輩たちの蒼い顔、顔。

「4月」新入生歓迎行事…入学間もない、いたいけな新入生をあの手この手で広研に歓迎。あることないことを

身ぶり手ぶりで不安そうな顔の新入生に広研を説明します。最近はテニス、ゴルフなどのサークルに新入生が流れ、広研としては、なかなか新入部員の獲得は難しくなってまいりました。そして2年生3年生はこの時期成績発表という地獄もあり、成績の悪い者たちは「広研なんぞに居てもいいのか？ 今年こそ勉強するぞ！」と成績表をもらった瞬間だけ真剣に考える時期。なんのかんの言っても部員のGUTSのおかげで今年は新入部員は70名を数えました。

「5月」新入生は広研入学式、新歓コンペ……新入生の緊張の顔、顔、顔。コンペ以前に、2、3年生にかなりおどかされて新入生は蒼い顔、上級生はニヤニヤ。毎年同じように新入生は魚市場のマグロのように座敷の廊下に並んでぐっすり休んでいます。

コンペの明けた翌週は毎年必ず部室に来る新入生がぐっと少くなります。当然といえば当然の結果。

・広研大旅行……東京近郊で一泊の親睦を目的とした合宿。とはいってもそこは広研、ホンネはコンペのための合宿。これも広研の悪い習慣となっています。

「6月」キャンプストア荷運び……部員が毎年楽しみにしているキャンプストアも間近。トラックや乗用車を連ねて学校から館山へ。

「7月」砂替え……店内の砂を入れ替え。今年は警官に「何をやっているのか？」と聞かれ、回答に四苦八苦。バケツを持って砂浜と店をいったり来たりで体はぐったり。夜食のおにぎりのうまさは忘れられない味となりました。

・キャンプストア開店。「8月まで……これは店長だった桐君が詳しく後に説明してくれているので省略。

「9月」秋合宿……久々の広告研究のための合宿。このころから後輩は年会を開いて来期の方針を決定づけていて役員には淋しい時期でもあります。

「11月」学生広告展……東京学生広告研究団体連盟主催の広告展。この日のために一年間の成果を部員たちはぶつけようとしていますが、どうもカラ振り気味。

「12月」委員長改選…ここで一年が終わり、頼もしい？ 2年生が役員となります。

☆研究活動について

今年はセクション制をとり研究活動を行ってきました。（研究活動の形態は毎年変わり、役員がBESTと思う形を採用しています。）

つまり4つの大きなセクションを作り、その下に2年生を中心としたグループを配置しました。

・広告理論……広告に関する一般理論を研究。あまりに研究対象が広くまとをしづらのが難しい分野ではあります。

・広告制作……実際に広告パネルを製作し、CF+ラジオCMなどを手がける。なかなか見事なCMを作るのは難しいとつくづく考えさせられます。

・企画……企業からの依頼、キャンプストアでも催物を手かけるセクション。計画倒れということも何度かありました。

・広告と文化……このセクションは広告が社会に及ぼしている現象をとらえようとするものですが、どうもミーハー指向に走りがちだったと言えるでしょう。

それぞれテーマを決めて一年間研究を行ってきましたが、頭脳がいま一歩明瞭でない広研部員のこと、予定のレールを大幅にはずれることも何回もあったのでした。話が前後しますが、ここで広研のスタッフについてお話しします。

役員は19名（うち女子1名）ですが、役員は決議によりポストを新設を設置したり、適宜人数の増減を行い、運営がスムーズに行なわれるよう配慮しています。

- ・委員長…全責任者
- ・運営副委員長…総会、会員会その他運営活動担当
- ・研究副委員長…研究活動についての責任者
- ・会計
- ・東広連代表理事…東広連立教代表
- ・東広連研究幹事…東広連の研究

活動担当

- ・OB局長…OBとの連絡等OB会担当
- ・記録…写真等行事記録担当
- ・三年会議長…三年会代表
- ・キャンプストア店長…キャンプストア責任者
- ・営業副店長…キャンプストア営業担当
- ・合宿長…キャンプストア合宿所責任者
- ・催物…イベント、音楽担当
- ・PR…キャンプストアのPR担当
- ・営業会計…キャンプストアの売り上げ計算等担当
- ・合宿会計…合宿費等会計担当
- ・出版…機関紙発行等担当

以上が、今年の役員の職種分担と言えます。

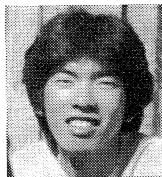
現在このように広告研究会は活動を続けておりますが、せ若輩の集団でありますので間違った方向に広研全体が進んで行くこともあるかと思います。これからも我々に御指導、御鞭撻を賜りますよう、何卒よろしく御願い申し上げます。



C·S 現況報告

第20回立教キャンプストア

店長 桐 基晃



僕が第29回立教キャンプストアの店長を務めた際、色々な年代のOBの方々とお会いして、昔のキャンプストアの話などをうかがったことがあるのですが、そのときある事を強く感じました。それは、キャンプストアがはじまってから29回目をむかえるまでの間に、キャンプストアの性格、部員のキャンプストアに対する考え方などはだいぶ変化してきたのだなということです。実際、キャンプストアに来店されて、自分達の頃とは違和感を感じたOBの方々も多かったと思います。

またこういったお話しの上で今のキャンプストアに関しての御意見もうかがったことがあるのですが、ここで面白いのは、その意見の内容がOBの方の年代、つまりそのOBの方がいつ頃のキャンプストアを経験したかではっきり分かれていることです。傾向としていいますと、かなり年輩のOBの方、つまり初期の頃のキャンプストアを経験されたOBの方は、現在のキャンプストアを見て、「厳しい、固苦しい、陳腐だ」という印象を持たれるようですし、中期から後期にかけてのキャンプストアを経験されたOBの方々は、「甘い、だらしない、ふがいない」という印象を持たれるようです。

これは、当時と部員のキャンプストアに対する考え方方が変化してきた結果だと思うのですが、年代によって意見が相反するというところが、その変化の過程を見る上で大変興味深かったのを覚えています。このように、キャンプストアも30年間の間に色々と変化してきたようですが、それは広研内におけるキャンプストア関係の組織という点にも言えるようです。

ここでいう組織とは、役員の役職分担関係の事ですが、ではここで現在のキャンプストアの組織を簡単に説明してみたいと思います。キャンプストア系の役員は現在、店長はじめとして、営業副店長、合宿長、催物、PRといった5役の他に、会計、営業会計、合宿会計の会計3役という具合になっています。

これらの役職でキャンプストアの仕事を分担して運営しているわけですが、これらの役職の仕事内容はといいます

と、まず店長は開店前に、店用のパンフレットの広告取りや看板取り、ユニフォームの調達、協賛会社探しなどを主な仕事とし、営業副店長は主に実際の営業面に携わって、仕入から店内装飾、調理、販売などを監督する役目を負い、合宿長は合宿所における部員の衣食住すべての面の責任者となっています。

また催物という役ですが、これはキャンプストアのイベント関係の担当者で店で使用するレコードをレコード会社からもらって来たり、新人歌手を呼ぶためにプロダクションなどと交渉したりするのが主な仕事で、期間中のイベントなどを企画したりします。

そしてPRという役は、開店前には雑誌社、新聞社、テレビ、ラジオなどを回り、パブリシティをしてもうための働きかけなどをし、地元における奉仕活動、たとえば地元警察と協力して小学生対象に自転車乗り方教室を開いたり、勉強会をもったり、毎朝の浜辺の清掃も、担当者として行なっています。これがキャンプストアの運営面であり、その他としましては、会計業務の担当者として、営業関係上と合宿関係上で営業会計、合宿会計とに分担されており、会計全般の責任者として会計という役職が置かれています。

以上が現在のキャンプストアの全組織です。このようにしてここ数年は行なわれてきていますので、自分のいた頃と同じだというOBの方々もいらっしゃるとは思いますが、お話を聞いた限りでは昔とはだいぶ違い、初期の頃にくらべたら数倍も複雑になっているようです。

こうして性格のみならず、組織面でも変化してきたキャンプストアですが、では一体現在のキャンプストアの状況はどうなっているのかといいますと、はっきりいってキャンプストアは今ピンチであると言えると思います。その理由としては2つあげられます。

まず第一は、海水浴客の中心が国道ができるから店前ではなくなり、遠くなってしまったので客の入りが悪くなり、営業成績がのびないというところにあります。この状態を具体的な例で述べますと、店の売り上げ高が物価上昇にもかかわらず、十数年前と同じだということでもわかると思います。そこでこういった苦しい台所を補

うために、開店前に店の看板を企業に売ったり、企業をクライアントにしたイベントを組んで協賛金を受けたりして開店準備金としているわけです。しかしここ数年はこれすらも社会全体の不況のせいかうまく行かず、去年の場合も開店直前になってOBの方の御協力でやっと間にあったという具合です。以上のように第一として経営面、資金面において現在のキャンプストアはギリギリのラインにおかれているわけです。

また次に第2としては館山におけるキャンプストアの立場という点です。これは以前まで店の前に国道がなく、店も海岸の砂浜に建っていたためあまり問題とはならなかったのですが、現在は店をはさんで両隣とも人家であるため、店内で流しているBGMとしての音楽や来客歌手の歌などのため近所から苦情が出ており、このトラブルがここ数年続いている。

これは店のつくり上どうやってもさけられない事なので、これからはこういったトラブルが生じないように店内に何らかの改良を加えなければならないのではないかと思われます。

つまりこの問題はそういった事まで考えなければならないほど緊迫した状況になっているということです。なんといっても地元の理解があってこそキャンプストアは今まで存続してこれたわけですからこれから先ずっと続けていくためには、この問題を早く解決しなければならないと思います。しかし地元におけるキャンプストアの立場はこのような事ばかりではなく、先程PRの役職の所で述べましたように、僕達も地元の人達と協力しあって奉仕活動という形で地元に貢献しており、地元でもなかなか評判が良いようなので、先に述べた問題をのぞけば、キャンプストアの立場もそれほど危惧することもないようです。

このように現在のキャンプストアは様

々な問題点を残したまま続いているわけで、いつこの問題が決定的ダメージを与えるかわからない状態になっています。しかしだからといってだまつて指をくわえて見ているわけではなく、去年にしても役員をはじめ部員一同力を合わせてこういった問題にぶつかってきたつもりです。ですがやはり一代限りではどうにもならない事なども多く、多くの問題を未解決のまま残しました。ですから今僕が望むことは、これから今年、来年とキャンプストアを開催する現役部員が、このような問題意識を持って取り組んでもらいたいということです。

また、広研は30周年を迎ましたが、40周年になっても50周年になっても、100周年になってもずっと千葉の館山でキャンプストアが毎年開催されていいってほしいということです。しかしそのためにはOBの方々の御協力、御援助が必要なときもあることと思いますので、これからもOBのみなさんに温かい目で見守っていただき、ぜひキャンプストア存続のために御協力をお願いしたいと思います。

